すね。

黒岩　しかもよかったのは、十五巻で幸綱先生や福島泰樹さんが最後だったのが、十六、十七の二巻を補足して、俵さんとかの世代まで入れましたね。

幸綱　続編二冊は二〇〇二年。ずっと後の話だね。正編十五巻の編集会では、俺としては佐佐木治綱を入れてもらおうということで。

黒岩　『続秋を聴く』が入ってます。

奥田　冨士田元彦さんが「あの歌集を入れてよかったですね」とおっしゃってました。「隠者の風貌がある」と。

幸綱　『現代短歌全集』も、冨士田元彦さんが下準備、リスト作り等をしたんだね。この全集は筑摩書房から発行されたけど、ベースは全部、冨士田さんの力によるものだった。余談だけど、姉妹編に「現代歌論全集」を考えていた。冨士田さんと俺とでね。もう少し『現代短歌全集』が売れてくたら実現したんだけどね。冨士田さんが中心になって近代以後の短歌論百編以上のコピーもとった。わが家のどこかにコピーの束があるはずです。

『冨士田元彦短歌論集』（国文社・現代歌人文庫）という新書版の本がある。これに六〇年代から八〇年代にかけての歌壇のことが詳述されている。冨士田さんはすごい酒飲みだったけど、克明に日記をつけていた人だった。だからこの本には、日付、人名、場所等が正確に書かれている。この時代のシンポジウムの日付、場所、参加者の氏名などを知るには、この本が一番信用できる。俺には残念ながら日記がないからね。

俺は冨士田さんと仲がよかったし、よく一緒に酒を飲んだから、『冨士田元彦短歌論集』のあちこちに名前がでてくる。冨士田さんは酒どころの福島出身で、よく酒を飲む人だった。ドイツ文学の大学教授だったお父さんも酒飲みだったらしい。その冨士田さんが、角川書店を辞めて「雁書館」という出版社を設立したのが七七年。そして、七二年から刊行していた個人誌「雁」を、七八年から季刊「現代短歌雁」として、リニューアルする。

その頃だったと思うけど、「心の花」の小紋潤君が、編集だけではなくデザインやレイアウトもよくできるということで、雁書館にひっぱられ社員になったのは。で、季刊「現代短歌雁」では、佐佐木幸綱・高野公彦・永田和宏・小池光の四人が編集委員になった。年四回集まって、午後早くから夜遅くまで編集会議をやった。当時、流行っていた「朝日ジャーナル」の真似をして、巻頭に編集委員が書いた時評を掲げたりして、活発な活動をした。

▽「現代短歌」から「現代短歌雁」へ

奥田　冨士田元彦さんは前衛短歌とその次の世代の大きな違いとして、どういうイメージを持っていたのですか。

幸綱　ずーっと、塚本、寺山、岡井で行くわけはない。僕とか春日井、小中、さらには高野公彦、永田和宏、小池光、河野裕子等、次の世代が活躍してほしいということだったと思う。いま言った『冨士田元彦短歌論集』がいちばんきちっと書いてある。

黒岩　あと、雁書館が発行している歌集は方向性がはっきりしていて、高野公彦さん、伊藤一彦さん、水原紫苑もそうかもしれないが、ある特定の、自分が責任を持っ